

古河城御成門と獅子ヶ崎

昨年末、藤懸氏ふじかけより旧古河城獅子ヶ崎遺構の土地が市へ寄付されました。同地は古河城御成門に続く土塁と堀の一部です。

古河城は古河公方時代を経て、江戸時代初期の歴代城主が数十年かけて拡張整備し、関東では有数の規模を誇る城郭でしたが、明治維新後の廃城令や河川改修により城域のほとんどが河川敷となり消滅したとみられています。

しかし一昨年、教育委員会による城跡の測量調査で、街中を細かくみていきますと当時の地割りがかなり残されていることが確認されました。その中の一つが、桜町の獅子ヶ崎です。

ところで獅子ヶ崎に隣接する御成門は江戸時代初期の城主、永井氏時代に造営されました。将軍家の日光社参の際、将軍が古河城二の丸御殿に宿泊するため、この門からお成りなになりました。

明治3年、武藤松庵が長谷寺側

から撮影した御成門を見ますと写真手前に百間堀が広がり、左手に石垣が築かれ、その上に土塀つちべいと高麗門こうらいもんが見られます。さらに左手には付随して櫓門やぐらもんがあります。ここには常時昼間2人、夜間は5人が交代で不寝番にあたり、櫓門上には合図につかう太鼓が置かれました。



長谷寺側から見る御成門

いざ戦鬪の際は百間堀を隔てた向かい側の出城と一体となつて防御にあたり、さらに門の北側面には土塁を突出させ門を攻撃する敵を横手から攻められる構造になっています。この突

出部は現在失われていますが猪の鼻先に似ていることから獅子ヶ崎と命名されたようです。

石垣を使った城門は関東では珍しいといわれ、この地の重要性が伺われます。幸い残された遺構の保存・活用法が今後の課題です。

古河歴史博物館学芸員 鷲尾政市